

韓国ゼミ合宿レポート

経済学部 2 年 横田圭祐

韓国に行く前の韓国に対するイメージと到着時の感想

近年、日韓関係は竹島や慰安婦問題などによりあまり良くないというイメージがあった。昨年末に安倍首相と朴大統領の間にやっと首脳会談が行われたが、ここ最近までに日韓の外交関係はよいものとは言えないだろう。たとえば総理が靖国神社参拝した時には、韓国では日本の国旗を燃やす過激な行動がマスメディアでもよく取り上げられていた。過去の日本の行いが原因で反日感情を生み出しているのは誰もが知ることである。

今回、ゼミ合宿で韓国を訪れることになった私は、反日という固定観念を払拭されることとなった。偶然、過激な反日家に会っていないだけかもしれないが、反日どころか友好的で日本に行ったことがある人は意外にも多いことがわかった。3月の韓国は、想像していたほどの寒さではなく、むしろ晴れれば暑いと感じる気温であった。空気は乾燥していて、日本のような息苦しさを感ぜない。視界は霞んでいるが、中国からの黄砂や排煙などが原因と考えられる。仁川空港についてホテルに向かう道中に大きな橋を渡った。橋の下には漢江という大きな川が流れており、ソウルの人々の生活を支えている。この川は、古くから文明が栄えてきてところであり、ソウルの発展の原点でもある。

高速道路は車がかなりのスピードで走行しているが、不思議とスムーズに流れ、速度が完全に落ちきるような渋滞はしていなかった。料金所は日本と大差はないのにどういう仕組みで渋滞が少ないのだろうか。また、追い越しを頻繁に行う印象を受けた。名古屋の人々の運転は荒く、毎年、死亡事故ではワーストワンになるほどだが、ソウルの運転は名古屋と比べても荒いものであった。自動車に関してはあと2つ、感じるがあった。まずは、クラクションに関して。日本人は極力クラクションを鳴らさないが、ソウルではクラクションを、車線を変える合図のようにして使われていた。あれほどまでに車線変更が行われるならば、事故はやはり多いのだろうか。

生活面で戸惑ったことは、まずトイレの水圧である、韓国の下水管は細いようで、日本のようになんでも流してしまうような水の勢いはない。便器の隣にはたいていゴミ箱が置かれ、使用済みのトイレットペーパーは流さないことが当たり前である。どうしてもこの慣習になれることはできなかった。買い物では、おまけの文化ということもあって、+1の文字が至る所に見受けられた。また、+1と書かれていない場合でもおまけをしてくれることもあり、温和で親しみやすさを感じた。しかし、その反面、利益はちゃんと出ているのだろうかという疑問や品質がそれほど良くないからではないだろうかなど心配になる点もあった。接客に関しては、明洞周辺のお店では日本語をよく学ばれており、不自由なく買い物することができた。日本人のお客を大事にしているのはよくわかるが、日本人に対する押しの強さが並大抵のものではなかった。お店では、店員の数の多さに驚いた。特に飲

食店では、多く見受けられた。物価が日本に比べて低く、多くの労働者を雇っても負担が少ないためではないだろうか。さらに、プルコギや焼き肉などでは店員さんが調理をしてくださることも、従業員が多い理由と考えられる。プルコギを食べた時は、トングで肉を混ぜていたら店員さんに手を払われることがあった。お店で食事をするときは何もしていないでいることが一番である。

ソウル市内に限ったことではないがとにかくコンビニエンスストアが多い。多いところでは、50m間隔で何件も立ち並ぶ。その中でも圧倒的に多いのは、セブンイレブンである。ソウル市内なら適当に散策していれば3店舗はすぐに見つけられるだろう。サムスン電子へ向かう途中にあるサイクリングロードでは、隣のコンビニまで歩いて2分もかからないだろうというまでの店舗数である。そのほかにも、ダンキンドーナツなど、すぐ近くに同じ店を構えるものがいくつも見受けられた。日本という狭い世界しかない私は、韓国の文化や慣習に圧倒されてしまった。

李王朝の宮殿の特徴

我々は、朝鮮王朝について学ぶため、昌徳宮を訪れた。韓国では、人工的な地形よりも自然な地形を重んじられる。そのため、起伏が激しい道や都会のすぐ近くに山があるなど、街を歩いていても実感する。昌徳宮は自然を生かして作られた王宮のお手本のような建物である。下の写真は仁政殿である。ここは、昌徳宮の正殿であり、王の即位式や国事行為などの公の行事を行う。内装は、カーテンやシャンデリアなど西洋風になっている。中には、青い瓦の宣政殿があり、王様はここで政務を行っていた。

青い瓦は、王の執務室しか使えないらしい。現在、韓国の大統領の執務室の瓦は青色ですが、この瓦の色から因んでいる。また、仁政殿の前には一品〜九品と書かれた石碑が二列並ん



でいる。これは、文官と武官に分かれて、一品から順に位の高さを示す。位が高い一品が一番王の近くに並び、位が低くなるにつれて王からは遠ざかる。これは、身分制度の九品中正制である。

宮殿の裏には、後苑と呼ばれる裏庭がある。昌徳宮が多く王に愛されたのは、この後苑があるからである。後苑の広さは東京ドーム7個分にもおよび、池や東屋を設けられている。現在では、道がほとんど舗装されてい



て歩きやすいが、以前は自然の地形を生かした地に作られているため、木々がうっそうと生い茂り、移動には馬が必要とされた。

前ページ下の写真は、四角の中に丸がデザインされている。これは、天地人を表しており、後苑内にはこのほかにも同じデザインがされているものがある。玉流川の近くにあるかやぶき屋根の東屋も天地人を表している。当時の王は、自ら農業の体験のために池を田んぼにして実際に米を作り、収穫しているそうである。

東屋に注目してみると、一つ一つに違いがあることがわかる。天井に描かれている絵がすべて違い、また、必ず梅か蓮の花が描かれている。風水をととても気にするからであり、梅の花は猫の足跡のようでとてもかわいらしくなっている。王や王妃がどのように生活し、



王の田んぼ

何を見ていたのかがわかるほどに原型をとどめる昌徳宮はとても価値のあるもので、世界的に守っていかなければならない財産である。

高麗大学での交流セミナー

高麗大学は、韓国内で2番目に聡明な学校であり、開講してから100年以上の歴史を誇る大学である。キム・ヨナが在籍していることでも知られ、アメリカンフットボールをはじめとする様々なスポーツも盛んにおこなわれている。スケールは日本の大学をはるかに凌駕するもので、地下キャンパスやラウンジは日本で言うデパ地下に匹敵するほどである。キャンパス内には、様々な国の学生が見受けられた。交換留学生を活発に受け入れているようで、留学生専用の寮も敷地内にあり、韓国に興味を持つ外国人が多いことがわかる。

講義は、8割ほどが英語で行われるようで、最低でもハングルと英語が出来なければ入学することができない。レポート発表の為に別キャンパスに移動するまでの街並みはかなり繁栄しており、若者でごった返している。大学の周辺が栄える傾向があるようで、飲食店からファッションなど幅広いジャンルのお店があり、ひしめき合っている。レポート発表の場では、我々の英語のレベルの低さを痛感した。すべての学生が流暢な英語を話し、生徒が通訳をこなしていた。結果的には、先生が1人ですべての質疑応答に通訳し、ただ発表することで精いっぱいだった。われわれは、「日本の再生可能エネルギー普及と固定価格買取制度」について報告を行ったが、高麗大学生から、たとえば、「日本では再生可能エネルギーの普及を支える固定価格買取制度を維持するために平均家庭の1ヶ月電力料金から約500円が追加に負担されると聞いていたが、日本の国民はこの負担についてどのように思っているのか」、のような鋭い質問がいくつも出ていた。

高麗大学の学生は、相手に自分の考えを伝える能力がとても高いと感じた。交流会では、楽しい時間を過ごすことが出来た。言葉は違っても身振り手振りで大体は伝わっているようだった。日本語もかなり通じていたため、どのように日本語を勉強したのかを尋ねると、

独学で何年も勉強して身に着けたそうだ。また交流する機会があれば今度はハングルを勉強して臨みたいと思う。



高麗大学との交流セミナーの後

サムスン電子見学

ソウルから車で約二時間のところにサムスン電子の本社工場がある。二棟の大きな研究棟ビルになり、かなりの存在感がある。ここでは国内はもちろん世界各国から招聘された優秀な人材が 2000 人ほど集まりサムスンの新製品の開発に携っている。サムスン電子で 30 年働けば年収が 1 億円を超えと言われ、誰もが憧れる企業である。しかし、実力が重視される仕事なので、30 年間働き続けるのは至難の業である。サムスン電子が得意とする分野は半導体で、世界的にも愛用者が多いスマートフォンの GALAXY などを手掛ける。元々はこれほど大きい会社ではなく、国外には殆ど知られていなかった会社だった。なぜ、これほどのグローバル企業に成長したのだろう。それは、サムスンの創業者が将来を見据えて周辺の反対を押し切って、社運をかけて半導体事業に集中投資したことが、功を奏して、技術の進歩により世界の主流となり、一気に需要が高まったことが要因である。そして、サムスンの案内人から、昔、三洋電機から技術協力を受けるなど、日本の電子企業からの恩恵も多くあったという説明もあった。

現在では、大型スクリーンのテレビをはじめ、超薄型や曲面のもの、従来よりも色が鮮やかなものまで幅広い開発を行っている。液晶パネルを使っていない製品の開発も素晴らしい。洗濯機や冷蔵庫にも面白い機能がついているが、中でも大型送風機は迫力があつた。中国からの PM2.5 の飛来に対しても考えられており、空気を清浄しながら人間が一番心地よいと感じる風を送ってくれるこの機械は、相当値が張るものだろうが買う人がいるらしい。変わった商品でも注文があるのは、今まで築き上げてきたサムスン電子というブランド力によって、どんな物でも信頼できる製品だというイメージを顧客が持っているからで

ある。今後、サムスン電子がどのような製品を開発するのか楽しみになると同時に、落ち込んでいる日本の電子メーカーにも面白くて高品質な製品の開発を期待する。

韓国の歴史博物館と中央博物館

私たちは 2 つの博物館を訪れた。どちらも歴史に関するもので、大韓民国歴史博物館は朝鮮の独立など、割と新しい歴史を専門としており、国立中央博物館は古代の朝鮮から現代まで幅広く歴史を学ぶことが出来る。時代の流れを考えて、後者の話を先に行う。国立中央博物館は、古代の土器から光り輝く王飾器など、価値がある貴重なものが展示される。展示品は、レプリカよりも実物が展示されている場合が多い。古代においては日本と遜色がなく、縄文土器などが使われていたと思われる。朝鮮からの渡来人は、この技術を日本に持ち込んだことがわかる展示物である。古代における朝鮮の特徴は、装飾技術が発達していなかったため、とても地味な時代というイメージであることだ。

時代が進むにつれて王家の装飾らしい銅の装飾品や金細工の装飾が発達し、華麗な時代を想像させる。とても慕われていた王族の墓地からは生き埋めになったとみられる人々が発掘されることもある。5 世紀頃になると、朝鮮内での勢力争いが活発化し、高句麗、新羅、百済が次々と勢力を誇った。10 世紀の半ば頃には李氏の時代となり、ドラマでもよく耳にするイ・サンなどが現れ、王朝の最盛期を誇った。

中央博物館は広く浅くの歴史であるのに対し、大韓民国歴史博物館は 1800 年代からの歴史にスポットを当て、重要な文献などが主に展示されている。特に重要視されているのは数字で見る歴史である。1910 年代に日本の支配から逃れようとした 3・1 独立運動から始まり、1960 年代に独裁政権を打倒しようとした 4・19 革命など国の独立や民主主義に向けた運動が活発に始まった。しかし、世界大戦によって日本の植民地にされ、朝鮮人に対して、日本兵として出兵させることや女性に対してひどい扱いをしたことが、慰安婦問題などの今日に至る問題を引き起こし、また、反日感情をはぐくんだ。独立後の朝鮮では内乱が激しくなり、この頃になると韓国と北朝鮮に分かれていく。一つ誤解していたのは、内乱によって分かれたわけではなく世界の様々な力、特にアメリカとロシアの対立によって結果的に、朝鮮を半分に分けることに決まったということである。

韓国については日本で学ぶ機会ほとんどなく、知識的にも経験的にも皆無に等しい私が、現地で、韓国に対するあらゆる誤解をしていることに気付かされた。頭ごなしに反日国だからと拒否して遠ざけるのではなく、まずは国民一人一人が韓国についての知識を深めるべきである。大学で学習している生徒ですら理解が浅いことから、勉学から離れた人はなおさら知識を取り入れる機会が少ないだろう。次回、またこのような機会を頂けるのならばさらに下準備をして、より理解を深めることを目的とした旅行になるようにしたい。